

令和元年度第一回 教育課程編成委員会 議事録

【日 時】 令和元年7月18日（木） 10：00～10：40

【場 所】 ころ医療福祉専門学校壱岐校

【委 員】 壱岐市社会福祉協議会副会長 品川 洋毅

壱岐市立老人ホーム所長 吉田 博之

社会福祉法人博愛会特別養護老人ホームハッピーヒルズ（幸せの丘）

施設長 山口 壽美（欠席）

【事務局】 校長 中野 勝、介護福祉科学科長 田島 百合子、記録 藤 玲子

- 議 題
- 1 教育方針について
 - 2 経過報告及び今後の行事予定について
 - 3 重点教育目標
 - 4 教育課程
 - 5 その他

内 容

（1）教育方針について

中野：配布資料にもとづいて岩永学園の教育理念及び壱岐校の教育理念について確認。

壱岐校の存在意義

学生・保護者の進学に関する負担軽減、地域の介護福祉事業への貢献、リカレント教育の場の提供、人口減少の抑制・交流人口の増加。

介護福祉科の教育方針について

田島：ころを育む、思いやりを育む、笑顔を大切にする、自ら考え行動することを教育の根幹に置いている旨の説明をする。

（2）経過報告及び今後の行事予定

田島：平成31年3月～現在までの経過報告

3月5日、第一回卒業式。14名が卒業。留学生のうち4名は小田原、1名は大阪、2名は福岡の福祉施設に就職。日本人学生は全員市内の施設に就職。

国家試験の結果が発表され、日本人は6名中4名合格。1名はあと数点で合格だった。留学生の国家試験合格は非常に困難だと感じている。しかしその中にも合格点にかなり近い点数を獲得した学生が存在する。

現時点で壱岐校入学を希望している高校生の人数は確定していないが、壱岐高校から2名、壱岐商業高校から5名～6名。

今後のオープンキャンパス等を経て全員が入学してくれればと考えている。留学生については入学後のアルバイト先確保等の問題で定員いっぱい受け入れるのは難しい。また、面接試験等を経て、壱岐で2年間頑張れるか見極めていきたい。

品川委員：地域の方から、幼稚園に登園中の子が行きたがらず駄々をこねて困っていたところ、通りかかった留学生が手をつないで幼稚園まで同行してくれ、登園させることができたという話を聞いた。普段の生活の中で自然に地域住民に寄り添ってくれる姿を大変うれしく感じた。

吉田委員：入学式の際15名入学と聞いたが、1年生が14名になった？

中野：留学生のうち1名が、兄に介護が必要になったため来日を断念した。

日本への留学経験があり、学校としても期待していたが、今回は残念ながら入学辞退となった。

品川委員：オープンキャンパス（7月27日）の参加見込者8名が壱岐校に入学してくれるとうれしい。留学生等で学生数が確保されるのは勿論良いことだが、地元の高校生が壱岐に残って勉強できる環境を活用してほしい。壱岐校の学生の保護者から話を聞く機会があったが、その保護者は子どもが壱岐に残ってくれたことを非常に喜んでいた。

中野：オープンキャンパスはもとより、各高校で開催される進学ガイダンスにも積極的に参加し、高校生との交流・情報発信を積極的に行っている。今後も日々の情報発信に力を入れ、学生募集を推進する。

（3）重点教育目標

- ・ 国家試験日本人全員合格

昨年度は達成できなかった。

留学生の合格は大変難しい。専門用語が多く、意味を理解するだけでも相当な努力が必要。

- ・ 進路実現 100%

学生自身の希望を聞き取り適切な情報提供を行う。本人が主体的に進路を選択できる体制を整えるとともに、適宜個人面談を実施し、悩みや希望を聞き取っている。

10月中旬に昨年度同様合同就職面談会を開催したいと考えている。昨年度の反省を活かし、十分な時間を確保する。じっくり説明を聞いて主体的に判断させたい。

- ・ 地域とのつながり

昨年度実績

地元公民館と協力して「異文化を知る講座」を開催。

ウルトラマラソン給水係のボランティアに参加。

RUN 伴への参加。

社会人向けに介護福祉士国家試験模擬試験及び解答・解説を実施。

今年度予定

実習指導者講習会開催。

介護福祉士国家試験模擬試験（社会人受験者向け）

その他の催しについては要請があれば積極的に参加する。

- ・授業の量と質の確保

留学生と日本人の理解度の兼ね合いが難しいが、受け入れた学生すべてに責任を持って指導を行う。

- ・留学生の安心安全の確保。

（４）教育課程

カリキュラムの説明、シラバスの説明。

吉田委員：現場としては大卒者より専門学校卒業者の方が即戦力になるためありがたい。実習時間が多く、現場での経験を積んでから卒業するため、知識・技術が身につけている。そういう意味で価値ある学校だと感じている。しかし、受入側の問題として、経験年数の長い職員が新しい技術に追いついていなくて、若い職員や実習生が学んできた新しい技術とのギャップが生じることがある。その結果として若い職員・実習生から年長職員への信頼が薄れるという状況に陥ることもある。実習を受け入れ指導する側にも技術面の研鑽が必要だと感じている。

中野：経験年数が長ければ技術と知識があり、スムーズに指導できるものだとばかり思っていた。今回ご指摘いただいたことは大変貴重。教員一同で共有したい。

吉田委員：介護する側とされる側の常識のズレも問題である。介護される側にとっては当たり前のことを若い世代は家庭で教わってきていない（水温の調整で水と湯どちらを先に入れるか、履物の並べ方等）。年代で物事に対する感じ方が違うことを意識してほしいが、本来家庭で教わることであるため、教員がそれを全てカバーすることは非常に難しいと思う。

田島：教員側もそれを痛感している。可能な限り学校でも指導を行っているが、現場での気づきがあればぜひ情報提供していただきたい。